

「アルツハイマー病を治す薬はあるの？」
。残念ながら答えは「No」です。

治療薬を考えるには、病気の原因を追究しなければなりません。現状でアルツハイマー病の有力な原因は、アミロイドβ^{アミロイドβ}蛋白で構成された老人斑が脳内で徐々に蓄積して、神経細胞が変性脱落することと言われています。そして残念ながら、その老人斑を消し去り神経細胞を再生し脳を元通りにする特效薬は、いまだ開発されていません。しかし今、アルツハイマー病の治療にはさまざまな薬が用いられています。さて、どういうことでしょうか。

実は現代の抗認知症薬は、アルツハイマー病を治すのではなく症状の進行を遅らせる対症療法薬としての役割を担っているのです。

アルツハイマー病が進行してくると、神経細胞間で情報を伝達するアセチルコリン

▶アルツハイマー病を治す薬はあるの？



という物質が減少してきます。最初にアルツハイマー病に対して開発された薬は、脳内のアセチルコリンを増やすことで神経の情報伝達を回復させる働きを目的としました。現在3種類の対症療法薬がありますが、その剤形は錠剤、口腔内崩壊錠、細粒剤、内服ゼリー剤、シロップ、貼り薬があり、患者さんの希望など用途に合わせて選択することが出来ます。

そして医師は診察で、患者さんの認知機能低下ほどの程度か、気分の落ち込みや意欲低下などのうつ状態はないか、幻覚など

の精神症状はないか、胃腸が弱くて食欲が落ちていないか、などいくつかのポイントに留意して、なるべく患者さんに適した抗認知症薬を処方することとなります。

アルツハイマー病がさらに進行すると、脳内にグルタミン酸が過剰に放出されることで神経細胞が傷害され、ますます脳の働きが低下してしまいます。ですから、重度の際にはグルタミン酸の過剰な放出を防ぎ神経細胞を保護する薬が用いられます。この脳神経保護薬には、残存している認知機能を保つだけでなく、患者さんのイライラした感情を抑えて気持ちを落ち着かせる作用もあり、介護負担の軽減が期待できます。

以上、紹介した薬はアルツハイマー病が進行した二次的な状態に対して神経細胞の機能低下を補う働きを持つ対症療法薬ですが、実は昨年9月、今までの抗認知症薬とは作用が全く異なりアルツハイマー病の原因に働きかけ、従来薬よりさらに認知症の進行を遅らせる画期的な薬が厚労省に承認されました。次回はこのアルツハイマー病の新しい治療薬について紹介します。お楽しみに！

(亀田北病院院長)